



Fish Traps and Rice Paddy Fishing

## 安室 知

### はじめに

- ① 魚伏籠の諸相
- ② 魚伏籠の分類
- ③ 魚伏籠と水田環境



水田漁撈に用いられる漁具のひとつに魚伏籠がある。その先駆的研究として八幡一郎が注目されるが、彼はいち早く魚伏籠の分布と稲作文化圏の一致を示唆した。本稿では、八幡の研究の後を受けて、主として民俗学的アプローチにより、魚伏籠と水田稲作との関係について考察し、水田漁撈具としての魚伏籠の持つ民俗学的意味を明らかにすることを目的とした。

日本における魚伏籠の使用環境についてまとめると以下の4点になる。①大河川や湖沼に接して存在する低湿地、②増水期になると容易に冠水してしまうような低湿田、③農閑期を迎えて排水された溜池や用水路、④遠浅の潮間帯。

このうち、①②③が最も重要な魚伏籠の使用地であるが、それはすべて水田環境と関係している。①は住民の民俗技術により細々と開田されてきたところであり、いわば水田予備地といつてもよい存在である。また、②は、①と隣接して存在するような水田であるが、両者は雪解けや梅雨時のような増水期を迎えるといとも簡単に転換してしまう。①②ともそのような時期には産卵期を迎えた魚類が大挙してやってくる。そうした魚類を魚伏籠で捕らえることになる。それに対して、③はいわば稲作活動が生み出した人工的な低湿地である。農閑期を迎え、不用になった水を溜池や用水路から排除すると、そこに現れた低湿な環境が魚伏籠にはもってこいの漁場となる。その漁の特徴は、稲作暦に対応し、溜池や用水路といった水利施設の管理維持作業に付随しておこなわれることにある。そのため、漁は村や水利組織における共同作業的な意味合いを持ち、秋祭りといった村の祭礼と結びつくことがある。そのため、結果的に稲作水利社会において村人の精神的なつながりを担う行為として、こうした漁の機会は利用してきたといえる。